

## 都市のサイン計画に関する実例研究

日大生産工（院）

○椿 利文

日大生産工

日高 單也

### 1. はじめに

#### 1-1. 研究の背景と目的

現在、街中には様々なサインが溢れており、サインが発信する情報を読み取り理解することで、人々は目的地まで快適に移動することが出来ている。

人間は視覚・聴覚・臭覚・味覚・触覚などの感覚器官によって形・色・音など様々な情報を知覚する。中でも人間が受け取る情報の65%は目から、25%が耳、10%はその他と言われている<sup>1)</sup>。視覚は光を媒体としているので、他の感覚よりも情報が届くのが速く、情報を認識する機能に特に優れている。つまり、情報を伝達するためには、視覚を第1に利用することが効果的であるといえる。

公共空間におけるサインは、人々に対して円滑な移動や正確な情報を伝えるための重要な視覚情報であり、日常生活の上でも必要不可欠である。しかし、今日、社会の多様化や国際化により様々な情報を限られたスペースで、誰にでも理解できるように伝えなければならず、サインのもつ役割は益々大きくなってきている。

本研究の目的は、都市のサイン計画の実例を調査・分類し、現状を把握することで、都市のサイン計画の在り方を明らかにすることとする。

#### 1-2. 用語の意味

本研究において、使用される用語の意味を以下のように位置づける。

##### ①サイン

利用者の誘導案内に関する情報や、施設などを利

用するのに必要な情報を視覚的に提供しているものをサインの対象とする。

##### ②サインシステム

施設において複数のサインを総合的にデザインすることで、情報を適切に提供し、分かりやすい案内誘導を行うことをサインシステムと位置づける。

##### ③移動用サイン

誘導・位置・案内・規制の4種類の内容を表示し、視覚的に利用者に情報を伝達するサインとする。

### 2. 調査対象地及び歴史的背景

#### 東京ミッドタウン・港区立檜町公園

東京ミッドタウン（図1）は港区立檜町公園に隣接しており、2000年に東京・六本木の旧防衛庁の移転に伴う、旧防衛庁跡地と港区立檜町公園を含めた大規模な再開発として計画された。2004年に工事着工し、2007年1月に竣工、同年3月にオープン。一方、檜町公園（図2）は1963年に都立公園として開園し、その後、1968年に港区に管轄が移動した。

日本有数の商業地である六本木・東京ミッドタウンは性別、年齢、国籍、言語などを問わず、不特定多数の人々が毎日訪れる。東京ミッドタウンは半径1.6km内に40を超える大使館と9つのインターナショナルスクールが立ち並び、国際色豊かな場所となっている<sup>2)</sup>。このような場所は、特にサインの存在が必要不可欠であると考えられる。

よって、本研究では、東京ミッドタウンの外部空間と檜町公園を調査対象地に設定した。（図3）

---

## Study on Urban Sign Plan

Toshifumi TSUBAKI, Tanya HIDAKA



図1.東京ミッドタウン<sup>3)</sup>



図2. 檜町公園



図3. 配置図<sup>4)</sup>

### 3. 調査方法

本研究では調査対象地におけるサインの種類とサインの設置形式の分類を行う。分類方法としては、下記の(1)、(2)の2項目9種類による分類を行う。

#### (1) サインの種類

サインの種類は多種多様に分類することができる。サインシステムでは複数のサインを組み合わせることで、移動者に分かりやすく情報を伝達する。

そこで、本研究ではサインの種類を、以下の移動用サイン4種類に分類する。

・移動用サイン

##### ① 誘導サイン

施設等の方向を指示するサイン  
矢印などで表示

##### ② 位置サイン

施設名や場所名を示すサイン  
名称などで表示

##### ③ 案内サイン

施設の案内や概要等を図解するサイン

地図などで表示

##### ④ 規制サイン

行動を規制するサイン

注意、警告、禁止などの情報表示

#### (2) サインの設置形式

サインの設置形式は、周囲の状況により異なり、それに合わせて多種多様な器具・形態がある。設置形式は移動者に対して、視覚に与える影響・効果がとでもあり、情報を伝達するのに大きく関わっている。

そこで、本研究では設置形式の違いによる分類を、以下の5種類に分類する。(図4)

・設置形式

##### ① 自立型

床面や地面にアンカーなどで固定し、自立させる形式

##### ② 壁付け型

壁面や柱に取り付ける形式

##### ③ 貼り付け型

切り文字やシートなどを直接壁面やガラス面に  
取り付ける形式

##### ④ 可動型

床面や地面には固定せず移動が可能な形式

##### ⑤ 吊り下げ型

天井や梁などから吊り下げる形式



図4. サインの設置形式<sup>5)</sup>

### 4. 調査結果

#### 4-1. サインの種類別の調査結果

定めた4種類のサインに基づき、東京ミッドタウン・檜町公園における、調査結果を分類し、表1～表3にまとめた。

表 1. 種類別サイン数 (東京ミッドタウン)

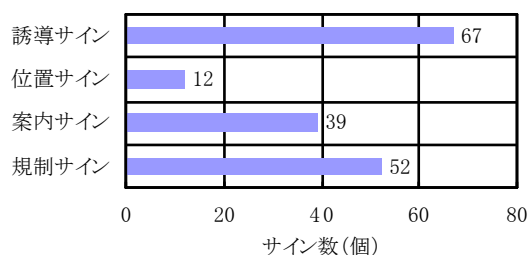


表 2. 種類別サイン数 (檜町公園)

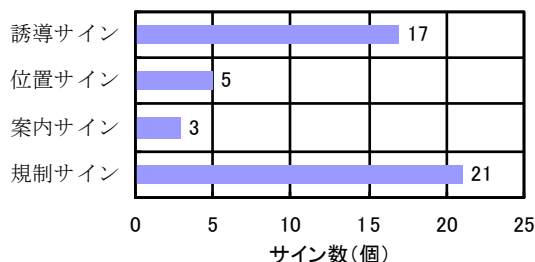
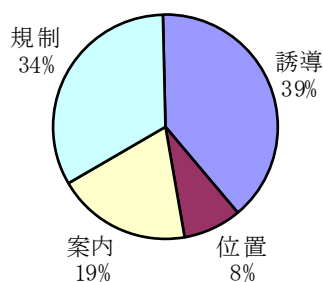


表 3. 種類別割合 (表 1+表 2)



・表 1. 種類別サイン数 (東京ミッドタウン)

表 1 より東京ミッドタウンの外部空間において、誘導サインが最も少なく 67 個である。次いで、規制サインが 52 個、案内サインが 39 個、位置サインは最も少なく 12 個で、表 1 全体の 7% しかない。

・表 2. 種類別サイン数 (檜町公園)

表 2 より檜町公園において、移動用サインの種類で最も多いのは規制サインで 21 個、次いで、誘導サインが 17 個、そして、位置サインが 5 個、案内サインが 3 個と極端に少ない。ミッドタウンの外部空間では最も多かった誘導サインは、檜町公園では規制サインよりも 4 個少ない。

・表 3. 種類別割合 (表 1+表 2)

表 3 より全体の割合において、誘導サインが最も多く 39%、次いで、規制サインが 34%、案内サインが 19%、位置サインが最も少なく 8% しかない。誘導サインと規制サインで、全体の 75% を占める。

表 4. 設置形式別サイン数 (東京ミッドタウン)

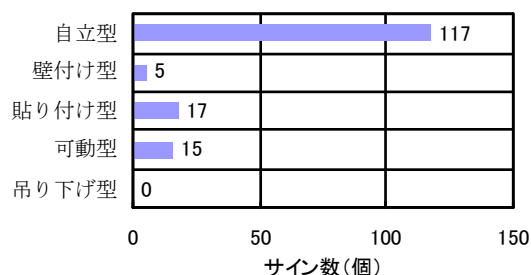


表 5. 設置形式別サイン数 (檜町公園)

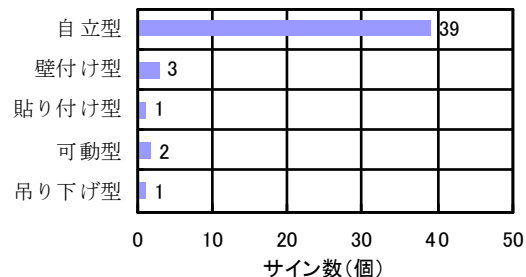
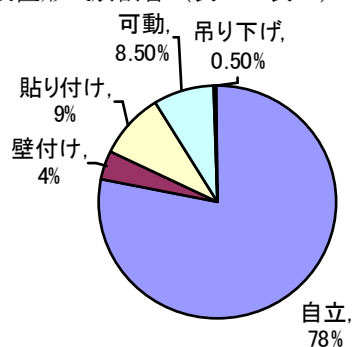


表 6. 設置形式別割合 (表 4+表 5)



4-2. サインの設置形式の調査結果

定めた 5 種類のサインに基づき、東京ミッドタウン・檜町公園における、調査結果を分類し、表 4～表 6 にまとめた。

・表 4. 設置形式別サイン数 (東京ミッドタウン)

表 4 より東京ミッドタウンにおいて、自立型が最も多く 117 個で表 4 全体の 75% を占めている。次いで、貼り付け型が 17 個、可動型が 15 個である。吊り下げ型に関しては、1 つも設置されていない。

・表 5. 設置形式別サイン数 (檜町公園)

表 5 より檜町公園において、自立型が最も多く 39 個で、表 5 全体の 84% を占めている。次いで、壁付け型が 3 個、可動型が 2 個、貼り付け型と吊り下げ型が 1 個である。

・表 6. 設置形式別割合 (表 4+表 5)

表 6 より全体の割合において、自立型が 78% も占めている。次いで、貼り付け型 9%、可動型が

8.5%、壁付け型4%、吊り下げ型は最も少なく0.5%である。

## 5. 考察

研究対象地である、東京ミッドタウン・檜町公園における移動用サインと設置形式の分類結果をふまえ、それぞれの特徴を以下のように述べる。

### 5-1. サインの種類

東京ミッドタウンにおいて、誘導サインが最も多い理由は、東京ミッドタウンは複数の施設によって構成されており、移動者が単方向だけでなく、多方向に移動することを想定されているからであると考えられる。誘導サインを多く設置することで、適切に移動者を次の施設や目的地まで誘導することができる。そのため、誘導サインが最も多く設置されていると考えられる。檜町公園において、規制サインが最も多い理由は、公園という公共の場所であることが大きく関係していると考えられる。公共の場所では、事故や怪我を未然に防ぎ、安全性を確保することがとても重要である。そこで、注意、警告、禁止などの情報を人々に伝達するために、規制サインを多く設置することで、安全性を維持していると考えられる。

サインは種類により、それぞれ目的や機能がある。案内サインは目的地を把握、誘導サインは目的地へ行動、位置サインは、位置やその施設を示すサインであり、誘導サインが示す目的地でもあるといえる。つまり、位置サインが増加するという事は、目的地が増加するという事であり、目的地へ快適に移動するために案内サインや誘導サインも増加すると考えられる。

### 5-2. 設置形式

自立型が最も多いのは、外部空間では壁や天井などの要素が少なく、これらの要素を必要としない自立型が利用しやすいためであると考えられる。また、位置サインとして、シンボルサインにも多く利用されていることも関係していると考えられる。そして、他の形式と比べても垂直方向への長さがあるため、外部空間においては視認性に優れており、視覚に伝

達するのにも効果的であるといえる。自立型は設置においても、自由度が高く、形式の種類も豊富なのでとても利用しやすいといえる。一方、最も少ない吊り下げ型は、吊り下げる場所が少ないため、外部空間ではあまり見られなかった。可動型は、規制サインが多く見られた。可動型は仮設的であるためにその都度、容易に設置ができ、規制サインの機能には利用しやすいと考えられる。

外部空間においては、設置が比較的容易なものが多く利用されていることがわかる。設置形式はサインのもつ機能や設置場所の条件ということが大きく関係しており、移動用サインと設置形式のそれぞれの要素が相互関係しあうことで、円滑に情報を伝達することが出来ると考えられる。

## 6. まとめ

本研究では、サインの種類、サインの設置形式の2項目9種類に分類した。それにより、サイン計画の現状とそれぞれの特徴を把握することが出来た。サインには意味・目的があり、それらを上手く組み合わせることにより、移動者に対して正確な情報伝達や、誘導をすることが出来る。

今回は、東京ミッドタウンの外部空間と檜町公園を研究対象地として選んだが、今後の課題として外部空間だけでなく、施設内においても調査・分析し外部空間と施設内との比較を行うことが必要である。サインと景観との関わり合いや、サインの色彩分析などについても明確にすることが必要である。

### 参考文献・URL

- 1) 飯岡正麻, 白石和也, デザイン概論, ダヴィット社, 1996年, p193
- 2) 3) 東京ミッドタウンHP, [www.tokyo-midtown.com](http://www.tokyo-midtown.com)
- 4) 東京ミッドタウン, 新建築者, 2007年
- 5) 武山良三, サインデザインハンドブック, 日本サインデザイン協会, 2004年
- 6) 田中 遵, 大塚 真, 日高 單也, 移動用サインと屋内広告サインとの混在環境が利用者に及ぼす影響, 駅構内に於けるサイン計画の違いについて:交通公共施設のサイン計画に関する基礎的研究その2, 日本建築学会計画系論文集, pp 23-30, 2005 11